

「虚から実に目覚めよ」 訴え

西部邁さんが「自裁死」してから3週間が過ぎた。あらゆる事象を破碎して、そして忘却という器に移していく社会は、彼の自裁死もまたそのサイクルに組み込みつつある。

しかし私はいまだにそのサイクルとは無縁である。なぜ西部さんは自らの命を絶ったのか。それを単に個人のレベルで考えるのではなく、歴史の文脈で捉えなければ、彼に申し訳ないとの思いがするからである。

個人的な関わりになるが、中学1年生のときに2年生の西部さんと知り合った。私は、札幌郊外から中心部の中学に越境入学したのだが、西部さんも隣の駅から同じ中学に通っていたのである。毎朝夕、2人で会話を交わした。

西部さんは吃音（きつおん）がひどい時でもあったが、とにかく私が知りたいことは大抵教えてくれた。逆に「人間とサルの違いは生産手段を持つか否かだ」と教師の言を私に披露したりもした。精神のゆがみというのは、社会生活への適応の度合いによるそうだと誰かから聞いたり本で読んだりしたことを、私を相手に解説もした。死という本能を意志でコントロールするのが人間だ、という会話もあった。彼は私の師であった。

13歳のときから78歳までの65年間。途中の20年近くは疎遠ではあったが、彼が東大教授、私がノンフィクション作品を著す作家となって再び交流は復活した。私たちは政治的、思想的な話より、少年期の思い出、日常生活やその変化などを話し合うことが多かった。ときに2人で6時間ほど酒食を共にしての雑談が楽しかった。

そういう交流を通しての言になるのだが、死亡時の「保守派の論客」とか「東大教授を辞任」、はては「朝まで生テレビ!の異能言論人」のような、西部さんを枠にはめた人物像に、私は心底から怒りを覚えた。彼も嗤（わら）っているだろう。

西部さんは真正直で神経質で、そして直線的な思考や生き方を貫いた。その自裁死に至る理念は、戦前の命の軽さ、戦後の人命尊重への痛烈な批判が宿っている。

学問の頂点に立つということは近代主義とその理論の吸収という地点にたどり着くことだった。そのまま東大教授でいれば特に苦労はなかった。象牙の塔にこもっていればいいのである。

しかし彼はその頂点にたったとき、この社会とそれを固めている人物の偽善や虚飾、虚構に気づいたのだ。東大教授を辞める前日に、「明日の新聞を見て驚かないでほしい。東大を辞めるよ」と言う。「保阪君、フリーになると税金や年金とか、それらはどうなるんだ」と聞くので、私が辞めるべきではないと言うと、品のない言葉を語った後、「もう耐えられないんだ」と答えた。

西部さんは右翼でも左翼でもない。近代保守主義の頂点に立っての知識や論理、それに西部さんの性格はこの現実社会の偽善や虚構を知的にも感情的にも見過ごすことができなかつたのである。右翼も左翼も嫌いというのが本心だったと思う。

多くの友人をもったが、また別れも早く、ときに切り捨てるといったつき合い方を選んだ。そこにひそんでいるのは、西部さんなりの「人間観」だったように思えてもくる。そのような西部さんを近代日本史の中にどう位置づけるべきか。私はその役割を果たすことによって、西部さんの自裁死を受け止めようと思う。

明治36（1903）年の旧制一高生、藤村操による日光・華厳の滝への投身自殺。昭和2（27）年の作家、芥川龍之介の薬物自殺。昭和24（49）年の東大生で光クラブの山崎晃嗣の薬物自殺。そして昭和45（70）年の作家、三島由紀夫の割腹自殺。近代のこの5人の自殺は、単に個人の自殺というより、時代そのものが演じた死だ。

彼らの残した言葉、あるいは自らの信条としていた言葉を並べると、藤村は「万有の真相は唯（ただ）一言にして悉（つく）す、曰（いわ）く『不可解』」。芥川は友人にあてた遺書の中で「何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安」。山崎は戦争によって温厚な人格が変わったのだが、「契約こそ最大の美德」といった人生観が破れての死であった。三島は「戦後の空間を鼻をつまんで生きてきた」が、自決へのきつ

かけではなかったかと思う。

むろんこの4人の中には、西部さんが受け入れ難い人物もいる。しかし、西部さんをこの系譜に連ねての歴史に刻む言葉は、「近代の学問、理論を前にさまよえる日本人。伝統倫理に復せよ」となる。簡単に言うと「虚から実に目覚めよ」と一身を賭して訴えたのではなかったかと思う。